

資料

純理經濟學の批評 (其二・完)

手塚壽郎

三

將來の經濟學は今までの純理經濟學が考へなかつた經濟心理を重視せねばならぬ。

所謂心理學派の經濟學は心理的原理を少しも取り入れてゐない。心理學派の内容を誤解せしめたこと甚しい。通常心理學派と云はるゝ奧太利學派は經濟心理を少しも考へてゐない。ゴッセンの法則に従て合理的に働く經濟人しか知らない。故に奧太利學派は古典派の傾向を押しつめ得る所まで押しつめて行つた者なのである。彼らの理論は論理的であつて、心理的ではない。彼らは或原理を

與へられたものとして其論理的結論を押し詰めて行つたに過ぎぬ。彼らにとりては最終利用の限度と各の財によりて得らるゝ享樂のみが考察の對象であつた。此點から見ればデエボンスの理論は寧ろ奧太利學派のそれに優つてゐる。なぜならデエボンスは勞働の不利用 *desutilite* を認めるからである。近代伊太利の大經濟學者 Ferrata も又奧太利學派に優つてゐる。彼はメンガー一派の人々よりは遙かに深く人の心理を解剖し、不利用を再生産費の一要素としてゐる。

パラドクサルな事であるが、數學派は恐らくは心理學派と云はるゝ奧太利學派よりは經濟心理を考慮してゐる。殊に最後の形に於ける數學派に於て然りである。(註) 此點に關して數學派經濟學はワルラスの稀少性 *Rareté* よりバレットの *Fonctions-indices* への興味ある進展を示してゐる。なる程バレットは純理經濟學から心理的關係を切り離した。バレットは其組織を築くに、人間は財を選びとるに或組み合せを他の組合せよりより有意義なりとして撰擇するし、撰擇の個人的理由の如何を問はず其組合せの系列が市場に於ける個人の作用となつて現れると云ふ客觀的事實を以てする。そしてバレットは云ふ、己のシステムは人間の行爲の動機が禁欲主義にあるにせよ又は純粹愛地主義にあるにせよ適用され得ると云ふ。經濟心理の如何は問ふ所でない。

(註一譯者) Pareto, Manuel d'économie politique 以後のローザンヌ學派を指す。但し Amoroso の立場は古い。

であるからバレットは機械的形式的なる理論を立つる古典派の如くであるように見える。かつて Kautz は云ふ、「スミス以來の新説の特長は物質的要因のみを考ふる exclusivisme brutal である。従て經濟學の建設者らは國民の經濟的政治的道德的精神的要因を無視したのである」と。(註)

(註) Kautz, 'Theorie und Geschichte der Nationalökonomie, 1860, t. II, p. 467.

現今に於てはワルラスの弟子なるシュンペーターは此古典派の特長を愈々強く取り入れてゐる。彼は均衡のシステムに於て商品の均衡しか考へない。「我らに與へられたものは諸商品の量であり、我らの問題は此ら商品の一つの量が變化するとき、此ら商品の量が如何なる變化をなすかを知るにある。我らの構造が與へられたものである以上、我らは孤立せる個々人が所有せる商品の量の變化を考察するに止らざるを得ない。」(註) 此狭い見方は誤である。

(註) Schumpeter, Wesen und Hauptinhalt der theoretischen Nationalökonomie, pp. 135, 142. et passim. 此著には後の「經濟發展の理論」に見らるゝような獨創の見はほとんどない。

だが經濟均衡の基礎としてのバレットの Fonctions-indices のシステムは均衡が個人の心理によりて變化することを示してゐるのである。(註) バレット自ら云ふ、「均衡は欲望と其障礙物との對立より生ず」と。たゞローザンヌ學派の誤は欲望を與へられたものと考へた點にある。實は此欲望こそ眞の

問題となるのである。

(註) Fonctions-indices の思想により、バレットが眞に如何なる進歩を經濟學に齎したか、何故に社會學に於て此態度を捨てたかに就して *Giornale degli economisti*, 1924, no. 1. に於けるバンタオレオニの研究を参照。

經濟の數學的取扱に對しては欲望の性質は意味をもたぬ。代數に於て用うる記號の値が無關係なると同様に、數學派經濟學は欲望の性質如何を問はない。然し實は此欲望こそ經濟均衡の基礎なのである。少しく注意して事實を観察すれば、將來の經濟學が商品の均衡よりも心理的均衡を考慮せねばならぬことが了解せられると思ふ。人間の精神狀態が根本であつて、經濟事實は其結果であり、貨幣現象は其附帶現象である。個人又は集團の諸心理によりて具體的均衡が如何なる真相を現してゐるか。これが數學派經濟學が未だかつて答へ得ざりし問題である。何となれば數學派にとりては欲望は與へられたものであるからである。

一例を爲替の理論にとる。教科書の爲替論の要素となつてゐるものは價格や商品の量や支拂の手段等である。然し余の見る所によれば、此理論は十數年前には眞理であつたらうが、今に於ては誤である。然るにも拘らず理論家は古いシエーマを其まゝ信じてゐる。我らは心理的要因の考察によりて此理論を修正せねばならぬと思ふ。爲替の例は均衡の實際問題に於て數學派の考へ得なかつた

精神的要素の働きの如何に大なるかを示すに足ると思ふ。要するに余の見るところによれば、總ての經濟學殊に文學的經濟學は貨幣現象に過大の重要さを置いて誤つた。反對に總ての經濟學殊に純理經濟學は人間の心理が社會の均衡に及ぼす働きを忘れて誤つた。前古典派の經濟學者は却て此點に於ける正しい理解をもつてゐる。(註) 我らは此前古典派の思想に歸らねばならぬ。

(註) 殊に Cantillon.

現今與へられた國に於ける爲替相場の變動は大部分心理的要素、經濟人が此國の貨幣に對しても信頼又は疑惑 (Confiance-dé fiance) なる要素に因るのである。故に商品、用役又は支拂用具との均衡を考ふるを要するのみならず、精神状態の均衡を導き入れねばならぬ。此表現は甚だ奇怪であるが、事實に合する。マルクが下落して獨逸の資本が流出したとき、もしマルクの騰貴に對する投機がなかつたら、マルクの下落は一層甚しかつたであらう。一層よい例は國際聯盟が奧太利に干涉し始めた時の奧太利に見らるゝ。一九二二年八月二十五日、一金クローネは一萬七千クローネ紙幣であつて流通紙幣は約一、二〇〇ミリアルであつた。國庫への貸付は十一月末に至つて初めて停止したのであるが、其間流通紙幣は二倍以上殆んど三倍に増加した。(十一月末日三、四〇〇ミリアル) 然るに對外爲替は恢復して一金クローネは十一月末日一萬四千五百クローネとなつた。(註) 初期に

於ては疑惑なる心理的要素と反對の心理的要素とが均衡し得なかつた。此均衡せざる力が爲替に働き物價の騰貴を惹き起した。第二期に於ては心理的要素のうち信頼のみが存在し、反對の心理的要素は均衡を生ぜしめ得なかつた。故に人が欲すると否とに拘らず、經濟均衡は物質的要素とは違つた要素にも依存するのである。

(註) Bousquet, Restauration monétaire de l'Autriche.

右の例は他の理由によりても興味深い。即ち經濟理論は永久不變ではなく、經濟事實の變化に順應すると云ふ例にもなる。現今の爲替は一世紀前、否十五年前の爲替とは異なる。(註)

(註) Bousquet, Essai, chapitre VI. 然し Villeueuve-Bargement, Histoire de l'économie politique, 1814, t. II, p. 212 に次の如き記述がある。"Dans cette situation, les possesseurs de capitaux ne voulaient point garder leurs fonds sous forme d'assignats discrédités, ni de marchandises, de crainte de pillage, ni de numéraire parce qu'il était rare et à haut prix, yes cherchaient naturellement des sûretés en yays étrangers et à se procurer des lettres de change sur les diverses places de l'Europe."

第二の例を貯蓄の問題にとる。文學的經濟は此問題をほとんど取扱はなかつた。文學的經濟學にとりては貯蓄とは或物を貯藏して置く個人的行爲である。それは全く物質的作用である。かつてバレットは此説をとつた。「貯蓄は個人が消費を差しひかへたる經濟財より成る。……かくて構成せら

る、貯蓄は貸付くことも出来れば、貸付けざることも出来る。貯蓄の形式と貯蓄の貸付とは全く別な作用である。之らを混同すべきではない」と。(註) 余は信ずる、此バレットの舊説は全く事實に反する。

(註) Pareto, Cours d'économie politique, §§ 418, 420.

ローザンヌ學派はこれに一步を進めてゐるが、左程の進境を示してゐない。バレットは云ふ、貯蓄は資本又は貯蓄資本 *Epargne-capital* に變じ得らると。これは要するに眞に存在するものは物質であり、人間は之を他の物に變化すると云ふ思想である。ワルラスの資本化の方程式も生産の方程式の一場合に過ぎないことは此間の消息をよく物語つてゐる。つまり問題の心理的方面は全然取扱はれてゐないのである。然し此心理的方面こそ本質的なのである。

加之、數學派は資本の市場と貨幣の市場を同一に見てゐる。余の考へでは、たとひ第一の近似法に於ても尙此れは許し難い主張である。リスト教授の論文は余の説を裏書するものである。(註)

(註) Rist, L'épargne : son mécanisme social et psychologique dans la Revue de Métaphysique et Morale, 1921.

貯蓄も一概に論じ得られない。(一) 自然經濟に於てはバレットの云つたようなシェーマは眞である。ロビンソン・クルソーは其食物の全部を消費せず、其一部を貯蓄する。次いで後日には食物を得る

爲には働かない。網を作る。貯蓄は資本に變ずる。(二)貨幣經濟に於てもクルソーの場合と同じようである。物を現物のまゝ貯へると、靴下の中に貨幣を貯へ後にそれを以て物を買ふ、それらは同じ現象のようである。(三)靴下の中に貨幣を入れて置くのは危険だと云ふので、それを郵便局又は銀行に預け入れ、欲する時に引出すとする。(四)小切手、振替による貯蓄。此場合と前者の場合との相異は常識によりても知り得る。何となれば此場合には物質的な何物もないから、例へば小切手を以て賃銀を受けた人が貯蓄する場合には麥があるのでもなく、貨幣があるのでもなく、貯藏する行動がない。あるものは心理的事實のみである。精神状態のみが實在である。此場合には小切手も附帯現象であつて、實在はかくれてゐる。

然し常識は誤つてゐる。(三)と(四)との間に區別をなすべきではなく、(二)と(三)との間にのみ區別をなすべきである。貯蓄は多數の個人を含む集團現象となるとき其性質を變化する。此場合の一全體としての貯蓄は其個々人の貯蓄の部分の合計とは違つたものである。かくて非貨幣の原理は現象の貨幣相を觀過すべしと教へ、心理的原理は人の精神状態に注意すべしと教へる。殘さるゝは均衡の原理によりて限局せられたる限界内に於て新しい綜合的理論を立つることである。

バントの所謂假運動 *Mouvements virtuels* (註) の方法は現在社會に於ける貯蓄の性質と職分とを

發見するに役立つ。今一社會の貯蓄の總額が増加したとする。如何なる現象が起るか。貯蓄者は其日常の消費を減ずる。然らば呉服屋に衣服が沈積し、倉庫に酒が集積すると考へ得る。又バレットの信ぜるが如く、此衣服や酒は後に資本に變化すべしと考へ得る。然し實際に於ては破れた均衡が次第に新なる基礎に新なる均衡が現れて來るのである。生産物の供給（故に生産）が需要の新状態に順應して來る。此事によりて既に（一）と（二）の場合に相異があるのが明である。然し（二）と（三）の間には一層大きな相異がある。最初の均衡の破壊は唯一のものでなく又著しいものでもない。もし靴下の中に金を入れるのが唯一の貯蓄の形式であるとしたら、均衡状態の變化は右に述べた程度で済む。だが貨幣が預金となれば又變化が起る。預金を受けた銀行は複雑な貨幣現象を發生せしめる。此現象は現代の社會では只記帳を通じて現れるが、其最終の結果として——他の事情同一なりとせば——利率の下落を生ぜしむる。資本は市場に溢れる。そこで經濟均衡が破れ、此利率の下落は資本の需要を誘起し、新しい方向に生産を發展せしめる。（此思想シュンペーターの思想に類似す）

（註—譯者） Pareto, *Manuel d'économie politique*, p. 117 參照。

此等の場合にもとより急激な變化があるわけではない。余の理論は只傾向を示すに止る。マルサスの法則の働き得るは人口の増加が莫大であるときにのみであると考ふる人が多い。然しかく考ふ

るは兒戯に等しい。マルサスの想像した傾向が正しい限り、人口が四倍になり、食物が二倍にならなくとも、災厄は現れる。人口が食物を超過し始むるとき、既に食物は人口を規制してゐるのである。余の右の理論と同じように、マルサスは只 *Mouvements virtuels* を示したのである。或人が貯蓄をしたからと云つて、直ちに消費が止み、それに相應せる商品の生産が著しく混亂し、利率が急激に下落すると云ふような譯ではない。余の理論は貯蓄の無限小の運動があつても眞理である。だが之をよく理解せしむるには、先づ不連続なる變化をとりて説明せねばならなかつた。假運動の假定をとり去つて連續的常態の貯蓄を考へる。此場合にも余の理論は變らない。貯蓄は只或生産に與へられたる或方向なり、經濟均衡に與へられたる或局面なりと云ひ得る。(註)

(註) リスト教授は *Une redistribution des forces de travail* なりと云ふ。

余の理論がシュンペーターの「經濟的發展の理論」の影響を受けてゐるのは事實である。然しシュンペーターの此發展の大誤りは貨幣現象を誤解してゐることである。シュンペーターは生産者が處分し得る支拂手段の事實のみに注意を拂つてゐる。だが重要な舞臺に活動する人の精神状態である。貨幣現象は幻影であり、現在の社會に於ては手記の戯に過ぎないのであるから、貯蓄する人は其の精神状態を銀行其他の債務者の爲めに役立たしむるのである。(小切手や振替を役立たし

むる譯ではない。)銀行其他の債務者は信用を利用するのでもなければ、靴下を利用するのではない、貯蓄者の精神状態を利用するのである。此精神状態は貨幣なる假現象の仲介によりて、生産上の或事實と均衡してゐるのである。

けれ共我々はこゝに止まるわけには行かない。なぜなら余は新なる均衡が如何に定まるかの問題の一面しか知らないからである。貯蓄の事實に於て均衡の形態に生じたる第一の混亂(mouvement virtuel)の場合に於ける)は明である。それは直接財の消費生産の減少となつて現れる。問題は貯蓄者の精神状態の利用(銀行又は債務者がなす)によりて生ずる第二の混亂は如何、此利用を支配する原理は如何なるものであるかである。此問題を答ふるには暫らく余の分析を中止して、純理經濟學を批判せねばならぬ。

四

純理經濟學のシステムに於ける主體は經濟人であつて、權利に於ても又殊に事實に於ても自由に平等であるのを其特質とする。此假定はかつて有益であつたが、今は捨てられねばならぬ。

メンガーは經濟心理を考へない。彼の出發點となれる經濟心理はゴツセンのそれに限られてゐる。

る。彼は階級の相異も、年齢の相異も、人種の相異も、性の相異も考へない。彼は抽象によりて總ての經濟主體を同様の性質をもつものと考へ、たとひ其間に相異があつても、それらは理論の關する所ではないと考へたのである。經濟人は平等であると同時に、欲するがまゝに其活動をなし得べく、同様の機能を盡し得べく、現象の動き方に同一の影響を與へ得ると考へられたのである。而して此經濟人が市場に現はるれば、其中の一人が他に傑れてゐることもなく、價格の平準を定むるものは商品の量と限界利用とであるとせられる。

數學派經濟學にも同じ思想がある。各經濟主體は同じ一單位であつて、各他の經濟主體と異なるは只單位だけである。今或市場に「*a, b, c, …*」の名をもつ數の個人があるとす。それらの人々は何れも平等で、其間の心理的相異は敢て問はれない。此ら經濟主體に對する商品 *a, b, c, …* のオ
 フイリミテは、

$Q_{1a} \quad Q_{2a} \quad Q_{3a}$

$Q_{1b} \quad Q_{2b} \quad Q_{3b}$

Q_{1c}

て表される。(註)

(註) Pareto, Cours d'économie politique, t. I, pp. 72—73.

夫れ故に純理經濟學は個人が平等でない場合、即ち此らの人が質的に相異した職分を盡す場合を取扱はない。其結果重大なる問題を取扱はないこととなる。……なる個人は互に平等であるのみならず、自由であるのであるから、國家とか市町村と云ふが如き行政組織も、サンヂカー、カルテル、獨占のような集團組織も何らの作用をなし得ないと考へられる。經濟人は自由に發展し、欲するがまゝに競争し得ると考へられる。又「此システムに於ては總ての經濟財は總ての個人の所有物となり得る。商品の所有權は之を消費する絶對權を含む。……總ての個人は欲する商品の生産を自由に企て又は自由に廢することが出来る。又總ての個人は其收入のうち欲する部分を貯蓄し、欲する資本となすことが出来る。」(註)

(註) Aupetit, Essai sur la théorie générale de la monnaie, p. 51.

もとより此假定は大部分に於て事實に合する。此概括は我らの眼前に動く經濟組織の大體の表象である。オーブチは此理論的條件の妥當性を證明するために法律を引用し、それらが法の規定と一致してゐることを述べてゐる。然し事實に於て法律は幾多の例外を設けてある。而して此らの例外は甚だ重大であつて、之を觀過する譯には行かない。もし純理經濟學の立場に立つならば、事實と

著しく異なる表象、云はゞ事實のポンチ繪しか得られない。國家は經濟組織に對し強制的力を加へつゝある。例へば租税を課し、競争なく國民所得の少からざる一部を收受し、之を再分配する。又國家は無數の法律を設けて財の生産消費に關係する。例へば鐵道に於ける競争は全くあり得ない。石炭、鐵等の重要商品はトラットやカルテルによりて規制せられてゐる。勞働組合の勢力の強い國の勞働市場は其大部分に於て獨占状態にあると云つてよい。されば經濟主體は自由でもなければ、平等でもない。然るに純理經濟學は紐育の大銀行家と Hebrides 島の漁夫と、ランカシーヤの地主と Whitechapel の勞働者が質的に同一であると云ふ假定をしてゐた譯である。然し我らは此らの人々が經濟組織上に占むる各の地位と職分を事實に照して考へて見ねばならぬ。

メンガーやワルラスが經濟人を假定したのは或ひは許さるべきかも知れぬ。何故なら第一に簡単な假定を置くのが便利であるし、第二に——今まで學者が注意しなかつた所であるが——當時に於ける自由競争の假定と事實の不一致は今日より遙かに少かつたからである。メンガーやワルラスは自由主義が最高潮に達してゐた時に生きてゐたのである。彼らはサンデカー、カルテル、トラスト國家の干涉等を考へなかつたが、それらに關する問題は當時餘り多くなかつたのである。彼らの理論は云はゞ著しい歴史的影響を受けてゐる譯である。純理經濟學はユークリッドの幾何學よりは遙か

に多く環境の影響を受けてゐる。メンガー、ワルラスの時代には自由競争こそ唯一の實在であつた。マルクスも労働搾取を説明するに獨占や立法上の施制を考へない。マルクスの説明は純理經濟學と同じように自由競争の假定のうちに行はれる。

反對に前古典派の經濟學者は階級や經濟的階梯に注意する必要を認めた。彼らは此點に於てはスミスに遙かにまさつてゐるが、それは怪しむに足らぬ。歴史的事情が然らしめたのである。

Genovesi は人間を不毛階級と生産階級の二つに分類した。James Stewart は農業、商業、工業、財政、信用等の性質を嚴密に區別し、それらを機械的ではなく有機的に取扱つてゐる。

もとより純理經濟學も此らの問題を全然觀過したわけではない。バレットにいたりては獨占のみでなく、集産主義の場合を論じてゐる。バレットは經濟學概論に於ては自由競争の場合と同じように、集産主義の場合をも代數を以て取扱つてゐる。然しそれに對して我々は、先に自由競争の數學的取扱に對して加へたと同じような批難を加へ得る。且つ數學の使用が理論經濟學に欠き得ないとしても、我々は其使用をば方程式を同時的に解く場合のみに限らねばならぬ。此場合のみは、我々は數學を以てするに非れば經濟的システムの諸部分の間に存する相關的依存關係を解くことが出來ない。數學派經濟學が獨占を入れて來たことは慥かに數學派の勝利である。然し此勝利は經濟的領域

に新しい何ものかを加へたであらうか。疑はしいと云はねばならぬ。

最近の奧太利學派は此點に於て頗る興味ある見方をしてゐる。ヴェイゼルは「經濟と社會」に於て既に、人が經濟活動中受くる制約を力説したが、殊に近著に於ける力の現象の研究は意味深い。ヴェイゼルは自由の不存在を力説し、シュンペーターは特種の場合にはあるが、經濟主體の不平等なる事實より如何なる結論を導き出すべきかを示した。彼はゴッセンの法則によりて働かない動態的典型をヘドニークな典型に對立せしめた。

然し此らヴェイゼル、シュンペーターの研究は之を一層展開せねばならぬ。純理經濟學は平等にして自由なる人間を假定した。今や此純理經濟學が觀過したのは何であるかを探求し、事實と何が異なるかを發見すべきである。そして古い原理に代る新なる經濟法則が見出されるであらう。將來の理論經濟學は階梯原理 *Le principe hiérarchique* を採り容れねばならぬ。

余は今既に此原理に就ての若干の指示を與へることが出来る。

(一) 經濟的システムを構成する個人中に存する第一の階梯はそれらの個人が充す職分が受働的なるか、能働的なるかに就て存する。シュンペーターは *grasso modo* にて企業者と然らざる個人とを對立せしむる。だが科學の進歩は理論を絶えず精密にするによりてなされる。余はシュンペーターよ

り遙かに緻密な分析をなすを要すると信ずるが、今此短編に於てそれを述べる事が出来ぬ。然し概括的に云へば、能働的典型に屬すべきは（クルップ、レセツプス、カーネギーの如く）經濟均衡のシステムに決定的影響を與へ得る性質の力を有する者である。受働的典型に屬するものは官吏である。役人は經濟的運動外にある。所謂 *Konjunktur* は官吏にとり、少くとも直接には利益もなければ不利益もない。市場の形勢が有利になつて來ても役人は利益を受けぬし、恐慌が起つても其結果に就て責任を負ふわけでもない。官吏は能率は頗る弱いが規則的に働く機械のようなものである。

此ら兩極端の中間に位する者がある。我らは總ての人を兩端の間に列べることが出来る。即ち各人が其心理的性質によりて經濟均衡の上に如何なる程度の影響を及ぼすかによりて系列を作ることが出来る。此場合にも相異は質的であるが、シエンペーターの場合に於けるよりは色彩が鮮明である。かくて一小製造工業者（例へば自轉車製造業者）も巴里の *rue de la Paix* の大寶石商よりは上位にある。後者は *Konjunktur* の影響に追隨して行くに過ぎない。其商業は受働的である。之に反し自轉車の小製造業者は能働典型である。彼は市場の變動に追隨して行くが、又此變動を作り出すに貢献するからである。同様の性質によりて階梯を作り得る。官吏の手によりて行はるゝ利用の國

家的生産は最も恒常的 *stable* であり、必需品食料品の生産も同じく不變的である。Konjunktur の如何を問はず、納稅吏や巡查の數に變りはないし、人はほゞ同様のパンを食ふ。生産中最も變化し易いのは奢侈品の生産であり、急激な變化をする。此ら二種の生産の中間に總ての産業が系列を作る。

かくて將來の理論經濟學が研究すべき二重の階梯即ち生産の階梯と、市場の状態に對する感受性及び市場に與へる作用の程度の差による階梯とがある譯である。

こゝにも相關的依存關係があつて因果關係がない。

(二)それのみではない。將來の理論經濟學は、經濟主體が自由競争に抵抗し、自らの力を利用する程度に據りて、此ら主體の階梯を作らねばならぬ。此階梯の頂點にはカルテル、ツラスト、獨占者、組織的團結をなせる勞働者組合がある。又能力の地代 *La rente personnelle* を有する經濟主體の獨占は同じく此類に屬する、彼らは自由競争を受けないからである。要するに此階梯の順列を定むる標準は各個人が享有する自由の程度である。能働的方面に見られたる此自由の程度は他人の制限を受くることなく(例へば勞働組合に對抗する雇主側の組合なきが如き)其作用をなし得る程度であり、受働的に見られたる自由は特權的地位(法又は勞働組合によりて外國人勞働者の入國を禁ぜ

られたる労働者の如き）享有の程度である。

經濟的階梯を組織的に研究すれば、如何なる状態に於て經濟均衡が現はれるかを知り得べく、又各國の經濟典型を知ることが出来る。

そこで先の貯蓄の問題も解決し得らるゝ。先づ最初に起つた混亂は貯蓄者の心理によりて均衡状態に到り、第二の混亂は此心理を利用する精神状態によりて均衡状態に達する。此貯蓄者の心理を利用する人の精神状態は主に現に存する經濟階梯の性質によりて決定せられる。

貯蓄は色々の經濟主體に入り得べく、それに應じて經濟均衡は夫々異なるであらう。例へば貯蓄を國家の手に至らしむるような經濟組織のうちには、（正確に云へば議會及び政府が貯蓄者の心理を隨意に支配し得る場合には）生産に與へらるべき方向は一國に有利ではない。其最もよい例は國債である。國債が歳入不足を補填するものなるときは、貯蓄者の心理を利用して活くる過大數の役人がある意味であり、又は社會立法によりて保護せらるゝ怠け者や働かざる者の多いと云ふ意味である。政治家（あるがまゝを云ふべく、敢て國家とは云はぬ）は間接に貯蓄者の心理を支配し得ること、昔國王が其臣民の身體を處分し得たに等しい。好例はロシアが佛國其他に於て募集せる國債である。佛蘭西の貯蓄者の心理はロシアをして無益な歳出——商業上必要なる物をも購つたか

ら、或程度まで生産を發展せしめたが——をなすを得せしめた。即ち佛蘭西の經濟均衡の混亂は國境を超えて其對重を求め、新に均衡を得たわけである。トルコの國債はトルコの港灣、鐵道等の生産を發展せしめ、又トルコ皇帝や國臣や其他貯蓄者と借手との中間にある人口の享樂を増した。之と異なるものに貯蓄が銀行を通じて産業に移り行く國即ち經濟階梯の異なる國の例がある。戰前の獨逸はそれであつて、銀行は預金を以て産業の資金を調達した。そこで貯蓄の問題は全く消え失せて、經濟均衡の問題のみが残る。戰前の佛蘭西人が貯蓄金額のみ大きいのに喜べるに對し、余は云はんと欲する、「それは官僚の寄生主義がロシヤに於て發展してゐたことを意味し、又トルコ皇帝や寵臣が元氣付いてゐたことを意味し、且つトルコの公共事業が發展したことを示すに過ぎぬ」と。これが佛蘭西の貯蓄の増加の唯一の意味である。獨逸の場合には貯蓄の増加は貯蓄者の心理に因り、新事業が興り、舊事業が發展し、國民的經濟平準が高まる——これが貯蓄の意味である。

今將來の理論經濟學の問題の取扱方の例として貯蓄を採り、簡單にそれを示せば、

- 一、それを全體として捕へる(均衡の原理)
- 二、貨幣上の説明に止まるべからず(非貨幣の原理)
- 三、物質的要因に代ふるに、心理的要因の研究を以てすべきこと(心理主義の原理)

四、社會の階級組織の諸典型を區別すべきこと（階梯の原理）

五

此らの原理は理論經濟學の總ての部分に擴張せらるべきものである。（註）げにや此らの原理は容易く檢證せられ得べき多數の實在に基礎をもち、科學的原理たり得べき普遍性をもつてゐる。故此らの原理は具體的事實を包括するに餘りに狭過ぎた純理經濟學の原理に代りて、將來の經濟學の原理となり得るであらう。

（註—譯者）原著者の註を譯出すると却て意味を不明ならしむる恐があるから、原文のまゝにして置く。此等の問題は「純理經濟學講義」に詳しく論ぜらるゝに相違ない。

“Ainsi en ce qui concerne la question du capital, il y aurait avant tout d'examiner la notion comptable du capital. A nos yeux, il est véritablement inconcevable que les théories du capital aient été élaborées sans qu'il soit jamais fait allusion à la façon dont pratiquement le compte capital d'une entreprise est tenu. Dans ce cas, on verrait pu'il n'y a pas effectivement un “quelque chose qui reste constant,” comme on le dit du capital, si ce n'est la volonté de l'entrepreneur qui désire avoir un minimum de possibilités économiques à sa disposition. Le capital est surtout une notion psychologique, la notion monétaire est une absurdité, la question des bilans or en Allemagne et en Autriche, où la monnaie a été dépréciée dans les proportions qu'on sait, le montre bien.

En ce qui concerne le problème de l'intérêt, les travaux de l'école autrichienne l'ont épuisé sensiblement au point de vue économique, il reste à montrer le rôle joué par lui dans l'ensemble de la société (principe de l'équilibre). On verrait peut-être alors que son rôle social est de permettre, à l'instar d'autres institutions du passé, l'existence d'une classe vivant dans l'oisiveté pendant que d'autres plus nombreuses travaillent (Nous ne disons pas : "vivant du produit du travail des classes ouvrières"); cette théorie plus ou moins marxiste de l'intérêt, n'aurait rien de commun avec les discussions éthiques sur sa légitimité ou son illégitimité, cela va sans dire.

Au point de vue des finances publiques, il se pose surtout des problèmes d'équilibre. Avec quelques réserves, nous partageons les vues de Sensini (Prime linee de fin. teor., 1917).....

學者はとかく己の思想の價値を過大に評價する傾向をもち勝ちであるが、余は此忌むべき傾向に陥るを欲しないから、自らの將來の理論經濟學に就ても若干の批評を加へて置く。余の原理は將來の學としての經濟學のプロレゴメーヌではなく、寧ろ將來の經濟學が行くべき道を示すに過ぎない。

第一に將來の理論經濟學は直接には勿論間接にも、何ら實踐的價値をもつものではない。もし假に此點を批難する者があつても、將來の理論經濟學は之を甘受せねばならぬ。加之今日まで人々は經濟學の實踐的價値を過大視して來た。英國古典派は、英國の經濟政策に與へたスミスの影響を吹聴し、或人はバスチャの推論こそ佛蘭西の自由貿易主義の決定的動機を作れるものであると云ふ。

何たる誤謬であらう。科學は此ら政策とは何らの關係をもつてゐない。實は世の人は他の理由なり動機なりによりて適用された方法をア・ボステリオリに是認せしむる爲めに理論を用ひたのである。此らの事項に於て決定を與ふるものは利害であつて、論理ではない。經濟均衡の理論は、之を實際的目的に用ひんとする希望は全く失敗に陥るべきほど、一般的である。余は之を遺憾としな

い。却て出來得る限り理論と應用とを區別せねばならぬ。

次に將來の理論經濟學が耳目を聳動せしむるような結果を齎らすであらうと考へてはならぬ。其理由は簡單である。均衡の原理が欲するように經濟問題を一括して捕へようとすれば、再び其要素が現れて來るからである。一例を擧げる。或一國が巨額の公債を募集せる後、其償却の方法を考へるとする。専門家は色々の償却の方法を考へる。然し均衡論の教ふる所によれば、償却は或人の資本を他の人の資本に移すことなのである。此移轉が耐えられ得べきが爲には、此國が經濟的發展をするか、又は市民の心理が公課の増加に耐え得るものでなければならぬ。バレットが晩年の論文に於て大戰後の經濟に對する對策を論じたが、所謂人の耳目を聳動せしむるような何もものもなかつた。なぜならバレットも余の如き見解をもつてゐたからである。世人は物價騰貴、貨幣價值の下落等に對する對療法を求めてゐたのに、バレットはかゝる小さき對策は一般的原因たる勞働の忌避、戦後の物

資の不足、八時間労働の存在する限り無意味であると云つた。此らの原因はかく一般的であり、明白であるから、人の耳目を聳動するに足らざるは勿論である。然しバレットが示したる理論は深い。De Sanctis はマキアベルの政治論は甚だ簡單であつたが爲に、其偉大なる價值が評價されなかつたと云つた。バレットが晩年 *Resto del Carlino* や *Secole* に載せたる論文は何れも此類である。

次に將來の理論經濟學はローザンヌ學派のように特種均衡の研究を排斥しない。此研究は具體の場合へ近づくに必要であると余は信ずる。他の科學上の論争と同じく、弟子は其師匠らの論戰の根底に根本的なる大相異のないのを認めることが多い。ローザンヌ學派は餘りに偏したし、マーシヤルと其一派は不必要な所に數學を用ひて、それだけで満足してゐたと云ふ滑稽を演じてゐる。Ricci 曰く、*“Nous sentons que la theorie de l'équilibre économique général est plus vraie que le théorie des équilibres particuliers, mais nous devons nous borner à en tirer des enseignements généraux et nous ne pouvons abandonner cette autre théorie moins complète, mais plus maniable.”* (註) 此理由によりて將來の理論經濟學は過去の頑迷を捨てねばならぬ。一般的問題と共に、特種の問題を考へねばならぬ。

(註) *Numero special du Giornali degli Economisti, déjà cité, p. 44.*

(譯者註) Ricci はバンタレオニの後を繼いで、ローマ大學に教授である。ローザンヌ學派の流を汲む。

此れだけの制限をしなければならぬが、余の研究から二つの結論が導き出される。

(一)新しい理論經濟學が必要であり且つ可能であるとの結論。何れが必要であるかと云ふに、古い純理經濟學は今や其發展を停止するに至つたからである。純理經濟學は提供し得べきものゝ一切を提供し了へたからである。何れそれが可能であるかと云ふに、純理經濟學を批評した結果新しい原理が見出されたからである。パレットは大戦後に於て此新なる理論を築き上ぐる可能を信じてゐた。然し此可能を信ずる者は彼のみではない。Mitchell 教授は其近著に於て、*“The war promise to give economics once again the vitality it had in Ricardo's day.”* (註) と云つてゐる。

(註) Mitchell, *The Prospect of Economics, dans The Trend of Economics*, New York, 1924.

(二)此新なる理論經濟學は過去の演繹的方法よりは遙かに具體的なる方法に歸り、且つ殊に數學的方法を全然捨て去ることに依りてしか起り得ない。Caton l' Ancien は家長に向つて、役に立たぬ者殊に老いたる病氣の奴隸を捨てよと教へた。Servum senem, servum morborum, et siquid aliud supersit vendat. 我らは此思想をとり入れねばならぬ。我らは數學が經濟學上に與へた貢獻を否定し得ない。然し今は新しい經濟學の建設を他の方法に求めねばならぬ。

同じ傾向が他の總ての科學殊に物理學に於て見られるのである。Il n'y a que la gravité et la pesanteur et云ふ式から導き出さるべき演繹は二重屈折の現象を説明し得ない。同様に水力學又は物體落下の方程式は毛細管現象 La capillarité の經驗的現象を説明するに役立たない。

だから我々は實在へ歸らねばならぬ。演繹派の反對者ではなかつた Mac Culloch がかつて云ふ、「廣汎にして正確な歸納より來れる原理に非れば固い原理とはなり得ない。經濟學者にしてもし廣汎な範圍に互りて研究をなすに非れば、富の生産、分配、消費を支配する法則は眞に知られ得べきものではない。經濟學者は人性や、社會の歴史や、藝術の歴史や商業、文明の歴史や、法制や、哲學書や旅行記や、一言にて云へば人類の進歩を促し又は遅行せしむる總ての原因を研究せねばならぬ」と。(註) 此言は誇張ではあるが然し、再び新なる思想を含んでゐる。理論經濟學は純理經濟學のなす所とは反對に、廣汎な知識の綜合に頼りてのみ進歩し得るであらう。新たに來るべき理論經濟學は啻に純理經濟學の教へを參酌すべきのみでなく、事實の歴史や、古い學說の歴史や、總ての實在のうち最も具體的なる實踐の教へを乞はねばならない。(一九二四、一二〇)

(註) Mac Culloch, Principe d' économie politique, trad. franc., 1851, t. I, p. 20.